

「移行期」の飼養管理の重要性を

再確認しよう！

前姉別診療所 獣医師 佐藤雄太

乳牛の分娩前3週間を「移行期」と呼びます。この時期は、胎子の急成長のため養分要求量が急増し、分娩に向けて代謝機能の変化も起こるため、栄養摂取量が分娩後の乳量の立ち上がり、産後の疾患、繁殖性等を左右すると言われています。

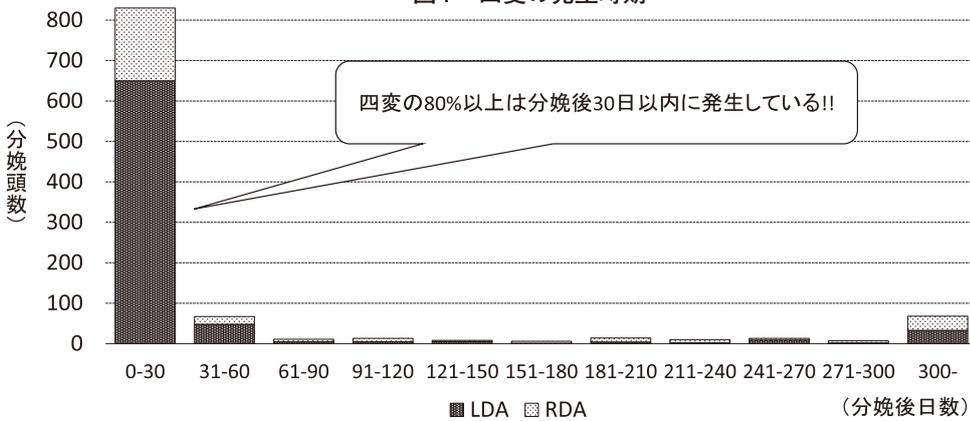
そこで今回は、移行期の飼養管理と密接な関係がある「第四胃変位(四変)」についてお話します。現在根拠管内では、年間に5,000頭以上もの牛が四変で手術を受けています。

四変は治る病気だから気にしない？

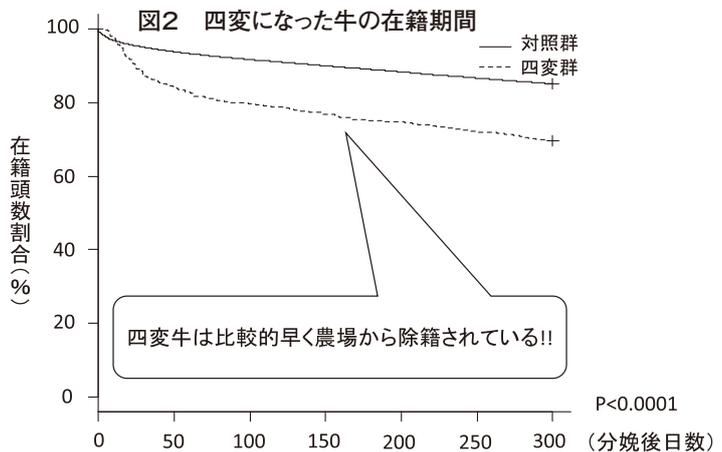
四変は、約80%が分娩後30日以内に発生しています(図1)。原因はさまざまですが、主要な原因の一つに移行期の飼養管理の失敗が挙げられます。

そもそも四変になるとどんな悪影響が出るのでしょうか？手術をす

図1 四変の発生時期



れば食べるようになるから、とくに問題はないのでしょうか？
この疑問に正面から向き合い、四変になった牛のその後の生産性を調べてみました。
まず四変発症牛では、病気としては治ったにもかかわらず、分娩後300日以内に約30%が除籍(自家廃用または売却)されています(図2)。一方四変にならなかった牛(未発症牛)の除籍率は15%ほどでした。さらに四変発症牛のなかで次回の分娩を迎えることができたのは約50%であり、未発症牛では75%でした。多くの四変牛が不受胎で、あるいは種付けもされずに売却されていたこととなります。すなわち、四変発症牛は未発症牛と比べて、明らかに農場在籍期間が短縮している(つまり仕事をしていない)ことが分かりました。



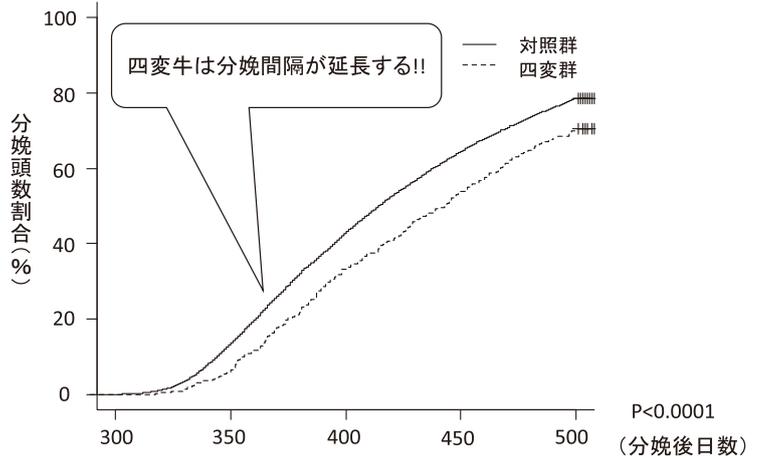
P<0.0001

四変牛は順調に受胎しているか

次に分娩間隔について調べてみました。四変発症牛の次の平均分娩間隔は443日で、未発症牛の414日に比べて分娩間隔が明らかに延長していました。また四変発症牛では、分娩後480日以内に分娩できた牛の割合が低下していることが分かりました(図3)。

以上の結果をまとめると、四変発症牛は、未発症牛に比べてその後の

図3 四変になった牛の繁殖成績



在籍期間が短縮していること、残った牛も繁殖成績が悪化していることが分かりました。

すなわち、四変の発生は農場の生産性を明らかに低下させてしまうのです。

四変とその他の病気の関係

四変が多く見られる農場では、どのようなことが起きているのでしょうか？

今回、浜中町内の農場を3年間の四変

発生率から、高・中・低発生農場の3群に分類して年間の経産牛死産率を比較したところ、四変高発生農場では、中・低発生農場よりも全体の死産率が高いことが分かりました。経産牛の死産率が高いということは、四変に限らず死産事故が多いことを示しています。こうした農場ではもしかすると育成牛が慢性的に不足していて、計画的な牛の更新ができない状況になっているのかもしれない。

四変を指標として飼養管理を見直そう

このように四変の発生は減産につながることが再認識できました。また四変の多い農場では、移行期をはじめとして飼養管理がうまくいっていないのかもしれない。四変が発生したら、たかが四変と侮ることなく、移行期の飼養管理を見直して、予防をしていく必要があります。

今後も四変部会では、四変を中心に産期疾病の予防についての情報発信に取り組んでいきたいと思えます。